

宮古地区人権啓発活動地域ネットワーク協議会(座長・宮原善男那覇地方務局長宮古支局長)は10日、平良地方合同庁舎で会合を開き、本年度に再委託された宮古島の講演会や多良間村での「一人権の花」運動などについて確認した。多良間小学校では21日に人権の花の植え付け式、12月4日に開花式を行う予定。参加者約20人は、今後の人権啓発活動に向け決意を新たに示した。

同協議会は、同支局内に所在する人権啓発活動にかかわる機関などが連携・協力関係を確立し、宮古地域内における各種人権啓発活動を総合的かつ効果的に推進するのが目的で設置されている。宮原支局長は、全国の法務局が取り扱った昨年度の人権侵犯事件を取り上げ「子供に対する事案が増えている」と指摘した上で、「一人一人の人権を守るためには、全ての人が思いやり

やいたわりの心で人権尊重の意識を持つべき」と述べ、同協議会の充実発展と人権啓発活動に期待を寄せた。講演会は来年1月10日にマティダ市民劇場で開催される予定。地方委託事業 宮古島市や多良間村などの地方公共団体が実施する人権啓発活動について、委託の手法を



9月の消費動向調査によると、消費者心理の明るさを示す消費者態度指数(一般世帯、季節調整値)は前月比1.3%低下の39.9となり、2カ月連続で悪化した。下げ幅は消費税増税を目前に控えて大幅に悪化した今年2月以来(前月比1.8%低下)の大きさとなった。内閣府は基調判断を8月の「持ち直しのテンポが緩やかになっている」から「足踏みがみられる」に引き下げた。下方修正は

地域への貢献の一環として、渡久山建設(渡久山ひるみ代表)は10日、伊良部大橋の伊良部側たもとそばの市道103号の一部区間で清掃を実施した。ギンネムなどで覆われていた歩道を見直し長く歩行しやすい空間に開けた。市道103号は、長間港と佐良浜漁港を結ぶ市道。その間の一部の歩道は緑に覆われた状態に。歩行が不可能で、住民からは開けた歩道にできないかなどの声が上がっていた。同社はシャボ台を導入し、伸び放題の雑木を撤去した。社員8人が参加し、心地よい汗を流した。渡久山代表は「これからも地域への貢献で協力したい。歩道がきれいさっぱりとなり、歩行者には快適な環境に改善された」と話し、額の汗をぬぐった。

寄稿

光の村の創立者である西谷英雄が昨年11月13日に亡くなった。本校は昭和44年に開校した四国初の私立養護学校で適職分析を軸にして作った教育課程で技術教育を展開する学校として誕生。その展開は知的障害児教育の新天地を拓き、県内で新地場産業を開くことに発展する。しかしながら昭和50年代になって、心身のゆがみを持つ繁栄時代の子どもたちが多く入学するようになると、豊かな時代に育ち、とり落してきた心と体の粘り強さを育てるために、有酸素運動を中核にする新カリ

キュラムを組み、その上にくらし、からだ、しごと、ことばの全人教育を展開するようになった。こうして、知的障害の子どもたち全員が自活することを目標に掲げ、良いものをつくり、良い態度で取り組むことが最良の教育につながるという考えのもとに職業訓練を徹底し自立する力の育成に努めた。平成に入ってからその成果は着実に上がり、卒業生の就職率は60%台をキープするようになる。西谷は就職できない卒業生の再教育からはじめ、成長する子どもを後を追いかけて学校をつくり、さらには、関東、近畿、石川などの広域福祉圏での施設作りを推し進めた。それは知的障害者が適材適所で生きる人生を拓くも

のであった。この広域福祉圏をほぼ形成するに至った時期、ついに西谷は宮古島イベント旅行と名付け、トライアスロン挑戦のため、平成2年11月、その第一歩を踏み出した。そうした光の村の挑戦が宮古島の方々に知られることになり、平成3年4月には全日本宮古島大会に参加へと発展。そのときかけをくださったのが、当時、平良市役所にお勤めだった長濱さん。高まる西谷を宮古島の飛行場に追いかけて来られ「ぜひ、本大会に参加してほしい」という要請をなされたこと。本校の

名が本大会に参加した。この時は制限時間をクリアできたのは教師1名と生徒1名のみ。この本大会に参加にあたって首都圏に位置するスポーツ選手を育成する専門家グループの指導を受けたが、そこから得たノウハウの収穫は大きかった。その後、学

光の村教育と宮古島

学校法人 光の村学園
光の村養護学校 土佐自然学園
校長 北野 光子

まざまなことが追い風に、光の村が進むべき道が見えた。そして、心と体の粘り強さを育てるためには、有酸素運動が最適と結論づけ、以後本校の教育の大黒柱になった。この高3宮古島卒業旅行は今年で25回を数え、本大会に挑戦させたいとの一端を担っている。こう